

評を加へて、朝報紙上に於て紹介した。

其畫を描いた人は、大下藤次郎君であつた、當時余は、いまだ其人を知らず、名もいまだ聞かなかつたのであるが、右の評が紙上に掲載せられて後、二三日を経て大下君と交はれる一友人が訪ね來り、余に告げていふ、大下君は君の評を見て、大に喜んで居られた、何故なら大下君の理想は、正に君の述べた所にあるのである、大下君は敢て非凡の大作を出し、若くは新機軸を案出して、一世を驚かさんとするが如き野心は無い、其期する所は、人心を樂ましめ、美の感念を起さしむるにある、君は恰も大下君の理想を述べた大下君は知己の言であると言つて大に満足して居られると、余は之を聞いて、大に大下君を慕はしく思ひ、右の友人を介して君と交りを訂した、大下君と余との交りは、斯の如くにして始まつたのである。

大下君は實に其作品の如き人であつて、温厚にして、同情深く、上品で優雅で、余に對して交情常に温かく互に相敬し、相信じて、數年の間、少しも冷却せぬ交りを續けた、君は實に余の誇りとする友人の一人であつたのである、君の思ひがけなき永眠は、余をして少なからず落膽せしめた。

### 「みづる」が非常の景氣

鵜澤 四丁

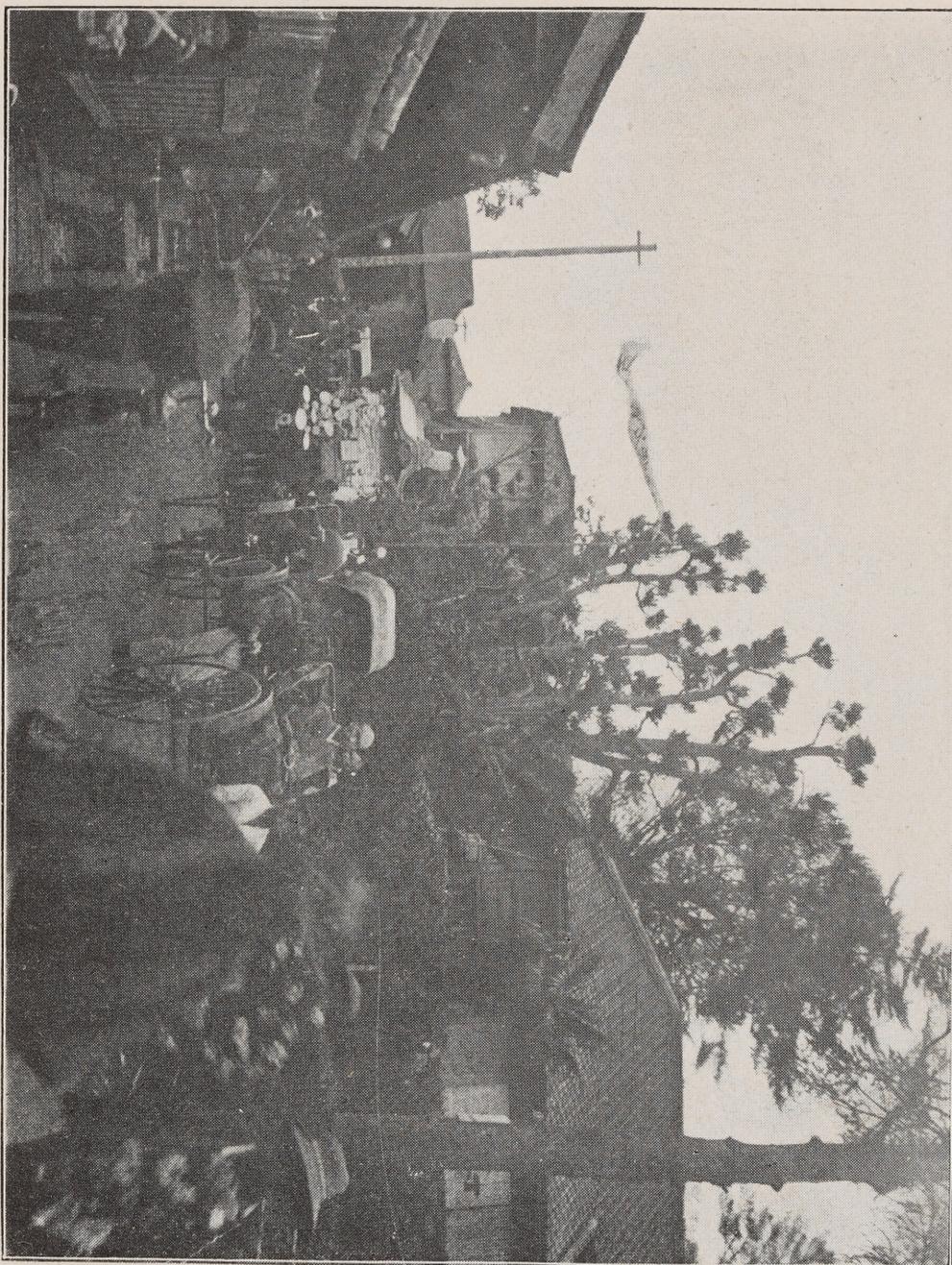
顧みると、大下氏と知己になつたのはもう十一二年も前でした。氏が十二月の末に畫囊や三脚を携へて、青梅に僕を訪ねてくれた、氏は自分の名刺を出して、自分は田山花袋君の友人で、こういふものです、何分よろしく。新年へかけて、この邊の寫生をするつもりだといふ事でした。氏は此頃から、新年を自宅に暮さぬ習であつたらしい。宿は坂上旅館へといふので、其夜直に訪問すると新年の繪ハガキを描いて、それに宛名を書いて居られた。種々な文學美術の話の末に、僕が曾てヴァンダイクの How to judge the picture を譯した

ことを語る、氏は非常に興味を以て聞いてくれた。丁度明治二十六年の暮に鎌倉からこの繙譯を携へて歸京して、大橋乙羽君に出版の件を計ると。その譯書が單行本として發行し得る程に、世間が西洋畫に重きを置いて居なかつたので、どうも仕方がないとその儘に乙羽君に托して置いた。すると二三年許たつてから博文館發行の通俗百科全書の「畫法自在」といふ日本畫の本の鼈頭用に「西畫鑑賞法」と題して使用したからと乙羽君からの通知であつた。無論西洋畫の門外漢たりし僕の繙譯であるから、今から見ると随分と誤譯が多くて、よくもあんな繙譯をしたものだ、と耻入る次第だ。しかし西洋畫に關する書籍は、殆ど無いといつてもよい當時であるから、多少の利益を人に與へたであらうと思ふが、何分にも、日本畫法の鼈頭の埋草では、人が知らぬと語つた。實際大下氏も、之れを知らなかつた。歸京したならば、早速求めて拜見することにしやうとの事でした。

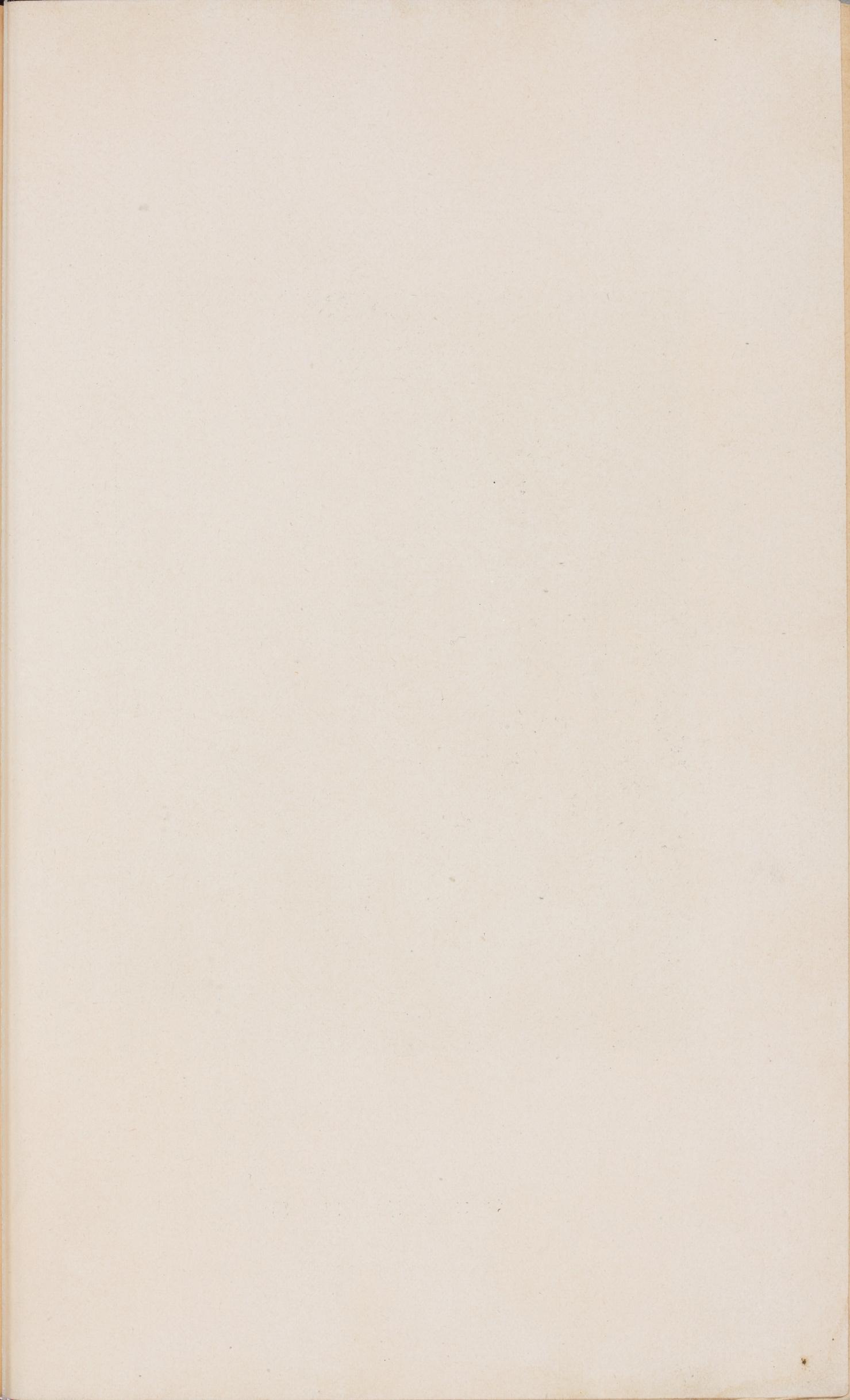
これ迄洋畫界に大下氏のあることは知らなかつた。全く世間でも、僕のやうな人が多かつたらうと思ふ。この頃三宅氏の名は知られて居つたやうに思ふが、何んぞ知らん、當時の水彩畫の専門家は三宅大下の二氏であるので、爾來氏と僕とは、宛ら十年の知己の様になつた。この時に大下氏は「水彩畫の葉」を執筆の腹案中だと語られた。「西畫鑑賞法」は是非拜見の上、水彩畫の葉の末に「參考すべき書目中に加へたい」と云ふてくれた。それで氏の著書が出てから博文館では「畫法自在」が數十版を重ねたとの事を聞いた。大下氏の著書も初めは書肆で大分冷遇されたやに聞いて居たがそれが出るとあんなに版を重ねたのは、水彩畫普及に付ては非常な力であつたことを證するのである。大下氏は翌年の春過ぎに青梅へ移つて、千ヶ瀬の宗建寺に居を卜された。殆んど毎日のやうに話しに行く、とうとう僕も畫を初めることになつた。氏に種々指導を受けた。大下氏も青梅には一年は優に描く處があるといふて居られた。その頃石川寅治氏や吉田博氏全ふじを氏等が、氏の處へ泊つて居て、處々を寫生された事があつた。この時大下氏はパーソン氏の著「ノーツ・イン・ジヤパン」を持つて居られたので、それを借りて讀むと非常に面白いので、その一二節を繙譯して、讀賣の月曜

附録へ投じたことがあつた。この頃の天下氏はパーソン氏に大いに私淑して居られたかに思はれた。それで畫風が餘程似て居たやうに思はれた。今日では一箇の天下式畫風となつて誰に似たといふ事は無論ない。温健な畫風は即天下氏の人格のほのめきと見てよいと思はれる。

天下氏は青梅に移つて靜に寫生に耽るつもりで居つたのが、心機一轉して、歐米行を思立つた爲めに、寫生を止めて、種々の参考書によつて外人向きの畫を約三百枚位を描いて、それを持つて渡米された。この時に石川寅治氏と全行せられた事は、諸君が御承知の事である。殆んど一年有餘で歐米を巡つて歸朝された。それから間もなく、青梅に移つて暫く靜養したいといふて來たので、幸に僕の隣家が明いて居たのでそれを知らしてやると、是非それへ移りたいといふ、間もなく引越して來られた。丁度七月の初と覺えて居る。僕も暇があれば、必ず畫箱を肩にして天下氏と寫生に出掛けた。千ヶ瀬、大柳、古渡、川原、根ヶ部、羽村、小作、拜島等へ出掛けた。遠い處へは握飯を持つて出掛けるのが常であつた。氏は寫生がなか／＼早い、そして一氣呵成の作に捨て難いものが澤山にあつた。寫生の道すがらには必ず近き將來に水繪の雑誌を出したい。活字はこう繪はこう等と自分の思ふ通りのものをやつて見たい。これが僕の理想の一ツだと話して居られた。體裁もから包み紙もこうとまで相談を受けた。それは至極面白い是非おやりなさい、僕も及ばずながら盡力しましやう、材料も今からぼつ／＼集めて、翻譯するものはして置かうと話しては希望に熱して二人で家路に著くのが例であつた。それから天下氏の洋行中に僕等は丁度巖谷小波氏が歸朝せられて獨逸仕込みの水彩畫をやるので、四季に一變位づ、寫生會をやらうといふので初めた會があつた。天下氏歸朝後青梅に移つてから、どうですとすゝめると喜んで出てくれた。その時は巖谷小波、全夾日氏、太田南岳、和田英作、三宅克巳氏、筒井年峯氏等が見えた時と覺えて居る。その時に、こう田舎に引込んで居てもこんな會があれば折々知己にも會へるし、東京に居ると殆んど全じやうな感じがすると喜んで居られた。それから寫生會は續いて四五會もやつたと覺える。遠くは松戸、久保澤等へも出掛けた。尤もこれは天下氏歸朝後であつた。それ



葬列 (於日白坂)



から青梅の連中とは御嶽やら原市場等へも寫生旅行をしたことがあつた。いよ／＼機が熟して大下氏は歸京する。みづゑの「發行やら研究所の創設やらが、氏の畫家として技量のすぐれて居つたことは無論であるが、氏獨特の事務家風な處が總てに於て成功せしめたのである事を斷言するにはばからない。初めて「みづゑ」を出さうとしたとき神田の東西社から出すつもりであつたが、それが止めになつて氏直營となつた。詳しい事も氏から聞いたがこゝにはいふ必要もあるまい。それで初めて一號を出すとき非常な景氣であるので、詳細を報じて來てかういふ譯であるから、喜んでくれと非常に得意であつた。氏は青梅に居た頃から水繪趣味の普及に熱心であつた。雑誌の發行もそれが爲め、研究所の創設もそれが爲めであつたことは諸君の知らるゝ通りである。で、氏の事業の偉大なりし事は今更に僕の喋々を待たないであらう。惜しむらくはもう十年の年處を氏に保たしめたかつたが、命數で致方がない。しかし氏もこれ丈の事業に力を盡して其功が顯著であつたことを自覺せられて逝かれたのであるから、氏も安んじて瞑せられた事と思ふ。

## 大下先生と私

正 親 町 公 和

今からでは、もう十年近くも前の事です。

私の姉は、時々目白の僧園へ行つてゐましたが、其頃姉はよくお寺で、お目に懸る先生の奥さんの事を話しました。私は其前から、非常に繪が好きで、盛に自己流の水彩畫を遣つてゐたものですから、是非先生にお目に懸り度いと希望を起して、奥さんから傳へて頂き度いと姉に頼みますと、何時でもいゝから遊びに來いと云つて下さいました。これが糸口で私は先生と、お心易くして頂くようになつたのです。始めて駒井町のお宅へ伺つた時、見て頂いた繪が、今でも二三枚残してありますが、先生はその可笑しな繪